

■大学生なら新書五十冊を読むべき。

私は大学の教師をやっている、大学生が新書を読む習慣がもはやないことを知っている。これを私はあまりにもったいないと思うので、学生には新書読書をひたすら勧めている。というのは、新書は書かれてある内容に比して値段が安く手軽だからだ。

つまり、コストパフォーマンスが高い。本は総じて、込められているエネルギー量と文化的価値の高さに比して、決して高価ではない。大学一、二年生ならば、新書五十冊を自己投資として購入し読むことを強く望みたい。

■読書は何のためか。

「本はなぜ読まなければいけないのか」という問いに対する私の答えは、まず何よりも「自分をつくる最良の方法だからだ」ということだ。

自分の世界観や価値観を形成し、自分自身の世界をつくっていく。こうした自己形成のプロセスは、楽しいものだ。しかし、この厳しくも楽しい自己形成を近年はばかにする傾向がある。とりわけ一九八〇年代以降は、その自己形成を軽んじる傾向が加速した。内容などはなくてもいい、まじめなのはくだらないといった風潮が蔓延した。その影響下で育った人たちは、真っ直ぐに自己形成の問題に向き合うことがしにくくなった。

しかし、自己形成の問題は、避けて通ることはできない問題だ。読書を通じてのまじめな自己形成などは必要がない、楽しければそれでいいといった風潮の中で見失われた自己形成のプロセスは、時に危うい宗教団体に求められた。

■なぜ、読書をした方が良いか。

あまりにも当たり前なことかもしれないが、考えることは、言葉で行う行為だ。一人で考え事をしているときも、言葉で基本的には考えている。言葉の種類が少なければ、自然と思考は粗雑にならざるを得ない。考えるということを支えているのは、言葉の豊富さである。

話し言葉の種類は限られている。日常を過ごすだけならそれほど難しい言葉は必要ない。しかし、その日常の話し言葉だけで思考しようとするれば、どうしても思考自体が単純になってしまう。表現する言葉が単純であれば、思考の内容も単純になっていってしまう。逆にいろいろな言葉を知っていることによって、感情や思考自体が複雑で緻密なものになっていく。これが書き言葉の効用である。書き言葉には、話し言葉にはないヴァリエーションがある。

言葉をたくさん知るためには、読書は最良の方法である。なぜ読書をした方がよいのかという問いに対して、「言葉を多く知ることができるからだ」という答えは、シンプルなようだがまっとうな答えだ。

■読書をしていないと……。

では、読書をしているかしていないかの影響は、コミュニケーションにどのような影響を与えるのであろうか。

はっきりと言えるのは、会話に脈絡があるかどうかという違いだ。中学生や高校生の友だち同士の会話を聞いていると、まったく脈絡のない話を次々にしていることがよくある。それはそれ下で友だち同士なので楽しい会話になっているのかもしれない。問題は、親しい友人以外と話す場合だ。脈絡のない話し方は通用しない。相手の言ったこととまったく無関係に「ていうか」という始まりで、まったく別の自分だけに関心のある話をしたならば、相手はうんざりしてきて人格さえも疑うようになる。脈絡のない話し方は、社会性がないと受け取られる。